

近世文芸の宗教的史観 (一)

第壹編 僧侶と文芸

村 田 昇

概論

美の範疇である崇高は、宗教的・男性的・闘争的・力動的・意志的であり、優美は、女性的・平和的・静止的・感情的である。中世文芸は崇高であったが、近世文芸は概ね優美に変わった。近世文芸に宗教性を探求することは、即ち崇高美を探求することになる。

日本の文芸復興は、信長の無信仰による近代的政治から発生し、近世史も亦ここから始まったと考えられる。ルイス・フロイスは、その報告の中で「信長はよき理解力と明晰なる判断力を有し、神仏その他偶像を軽視し、異教一切の卜を信せず、名義は法華宗だれども、宇宙の造主なく、靈魂不滅なることなく、死後何物も存せざることを明らかに説けり。」(耶蘇会士日本通信上、四三〇―四三一頁)と述べた。京都二条城の造営に当っては、石材不足の爲洛中洛外の石仏像を使用し、(日本耶蘇会年報一五六九年六月一日付フロイス書簡・大日本史料一〇の二、三五六―三五七頁)信長自身生神生仏であり、彼の上に万物の造主なしと述べた。(耶蘇会日本年報第一輯二四三―二四七頁)叡山を焼撃し一向一揆を鎮定し、中世仏教的構成を徹塵に碎いた。人類の文化史は宗教によって進化してい

るが、宗教が墮落する時、文化も亦退化している。宗教が根本精神を失って墮落する時、必ず英雄が現はれて、墮落を破壊する。信長はその英雄であった。但し、信長が破壊したのは形骸で、精神を焼き尽くすことはできぬから、焼土から春草が萌え出る如く、崇高な中世的仏教精神は、近世文芸に開華している。近世文芸復興の内容である宗教改革、ヒューマニズム、個人主義、自由主義、自然科学は、法然・親鸞・日蓮・道元の中世の文芸復興に胎動している。その根元は釈迦にあるとも考えられる。ともかく近世的崇高の母胎は中世にある。信長の宗教改革は中世への反逆ではなく、中世精神の怒りであり再現である。信長自らは急進な為、中世精神である神仏を捨てて悲劇に果てたが、一般社会は中世的精神を伝承して近世的崇高を顕現した。但し近世も末期に近づくに従ひ俗化萎微の症状を呈していることも事実である。人間が自ら主たる為には、人間の上に主たる存在を設定しなければならぬ。自分自身を統御する為には、人は進んで被統制者の位置につかねばならぬ。中世の天才はこのことを実行した。

然るに信長は神仏を捨てた。この信長の悲劇の原因を更に原因と

していることに、近世江戸文芸の墮落がある。近世文芸の悲劇は中世プラス人間ではなく、中世マイナス神にあった。創造的精力は、神仏信託の功德であるが、神仰を軽んじた近世人は、中世より伝承した創造的精力を更に養成することもなく、次第に使ひ果たして疲勞困憊したのである。近世の政治的覇者達は、教団の現実的勢力に懲りて、去勢・懐柔し、封建政治運営指導者として利用したので、傑出した精神家は僧俗共に出現の機が無かった。然し封建政治を憤り悲しむ文芸、太平の享樂を憂ひ悲しむ文芸、現実を厭離逸遊する文芸等崇高な美が、近世文芸史を貫流している。かくて近世史も亦日本民族の進化史である。近世人の生活が思想をリアルに象徴的に劇的に表現した傑作の作者は、殆んど仏教や老荘といふ東洋精神の体得者であつた。この意味から、近世文芸には崇高的優美又は優美的崇高の時代、中世的幽玄の近世的再現であるといふべきものを藏めている。近世人を近代的人間の方向に導いた僧侶の業績は表に出ないが、人間苦を忍受する精神力を涵養したことは認めねばならぬ。人類史にも珍らしい封建三百年の苦惱に耐え貫いた民族の生命力が、近代の崇高な文化を生産した。近世人を近代的に進化開発したのは文芸であつた。丁度近代現代の僧侶に指導力が無いので、智識層の宗教的永遠感情を満たし、近代化に導いたものが文芸であつたことと同じ状況であつた。近世文芸の宗教的精神を探究するには種々の方法が考えられるが、人為的な人間階級の位相が嚴格に保たれていたので、その僧侶・町人・遊女・君侯・農民・俠客・文人・芸人・学者等の階級位相に因つて研究を進めることにした。

僧侶

仏教はインドにおいて、自由人的性格を有つた為、シナに入つては、その選民意識と衝突して「沙汰政令」「廢仏」の如き迫害をうけた。「沙汰」とは仏教寺院内の僧を調査し、仏教教理に精通しない僧を、賦役と兵役を忌避するものとして、選俗を強要することで、それは仏教の庶民化を妨げ、実社会から隔離せしめ、山上仏教とし観念化した教理にした。この政令を嚴重に実施したのは、東晋の桓玄時代である。廢仏は北魏太武帝(四〇五—四三九)北周武帝(五四四—五七九)唐武帝(六八五—七〇五)後周世宗(九五四—九七二)所謂三武一宗が行つた。その中で最も苛烈であつたのは北周の武帝で、天下統一の野望にもえて急速な挙國戦力化を進め、國論統一、平和施設、戦力生産化の爲、仏道二教等一切の宗教を廢し、特に最も大教団である仏教から莫大な物資と人とを徵發して戦力生産力を増大した。やがて鄭の北齊を滅し、四万の寺を廢し三百万の僧を還俗せしめた。その廢仏の根本には「皇帝即仏」といふ選民意識があつた。信長の宗教改革と実によく似ている。

かくて仏教がシナに定着する爲には、選民意識と同化することが必要であつた。教相判釈ということもその現はれの一つである。かくて法華經を選んだのが天台宗の三祖智顛であり、華嚴經を選んだのが華嚴宗の賢首である。共に歴史的な歴史の実践社会、庶民の生活苦から遊離しか観念論に終始した山岳仏教であつた。観念論的學問仏教がここに始まる。かかる選民意識からなる仏教と、民族の選民意識を表白した儒教が融合したのが宋学である。宋学には陸象山学派と朱子学派の二派がある。象山は禪学の影響を多くうけて唯心的且実行を重んじ印度馬鳴造の起信論的哲學であり、朱子学派は理

氣二元論を唱えて稍々繁華であり、印度の世親造は唯識哲學的であり、唯識の真如、アラヤ識が、理と氣とに考察されてゐる。共に巧に儒教化した選民哲學である。儒教のもつ主知主義的で情的人間性を疎んずる學風と、仏教のもつ禁欲嚴格が巧に合併している。近世日本最高の選民であつた徳川氏は、選民意識を以て國を統治せんとし、宋學中の朱子學を以て霸道政治の哲學とし、官吏登用の學として、異學を禁じた。

抑々人類文化は宗教に起源し宗教に因つて発達してきたから、一國の統治者は宗教を立てて民をこれに帰依せしむることによつて統治の実を結ばんとする。日本の統治者も神又は仏に依つた。徳川氏は中世的非近代と皇室崇拜を泯滅させ、霸道・政治を發展させるべく、神仏中心の策を捨てて、朱子學を官學とした。然るにその朱子學は儒教的に偽裝された仏教であつた。

朱子の作「通鑑綱目」は、司馬溫公の「資治通鑑」に基づき、孔子の春秋の筆法に従つて、歴代の事蹟に褒貶を加えたもので、大義名分を正すこと、排外的精神を鼓吹して國民的思想の勃興を図るといふ二大目的をもつた。日本に朱子學の輸入されたのは後醍醐天皇の御代で、僧玄奘はこれを宮中に講じた。この縁により親房の神皇正統記は、朱子の「通鑑綱目」の精神によつて書かれ、水戸の六日本文史も亦、朱子の精神によつて書かれ、かくて朱子の正統論は王政維新の原動力となつてゐる。近世文芸美の崇高は、朱子學の与るところ少ししない。

徳川三百年太平の哲學となつたのは朱子學であつたが、徳川氏を倒したのも亦、朱子學の正統論であつた。幕府がシナの合理哲學

である朱子學を信奉し、人間の自然性を蹂躪して、嚴格に階級社会の秩序を保つたことは、近代日本の社会主義者が、マルクスを信奉した行動に似てゐる。幸徳秋水が「小生は儒教より社会主義に入り候」といつたことが、これを証明してゐる。

老荘の道から生じた「逸士」の道に、經典「維摩經」の黙不二の破斥、「大乘起信論」の一心二門が結合して、シナの禪は大成された。即ち逸士の洒脫、維摩の破斥、起信論の數理の三者が結合して禪が形成された。老荘の道から生じた「逸士」の道は、山岳に住むことを好み、庶民大衆の道でなく「選ばれた有識者の道」であり、「選ばれた弟子」によつて相伝される道である。禪はこれをそのまま承けてゐる。シナ禪五家中、日本に伝はつた主なもの、臨濟と曹洞である。

近世の禪僧は王侯より生活保護をうけ選民意識をもつた精神的貴族であつた。彼らには人生の生活苦は無く従つて底辺の庶民を救済する慈悲もなく従つて文芸も遺すことが少ない。文字通り所謂太平の逸士であつた。禪院は封建の世を嘆く不平武士が、書画を展じ漢詩を賞し仏教を談じ庭園を眺めて自然を愛し花を活け茶を喫し謡曲を謡つて楽しんで処である。この為にな近世僧侶社会が、禪芸術ともいふべき書画・庭園・華道・茶道・能楽の発達に貢献したことは認めねばならない。禪僧中にも勝れた詩書画を創作したものもあつた。古田紹欽博士著「近世の禪者たち」には、沢庵・江月・武野宗朝・白隱・仙崖を挙げているが、尚、崇伝・至道無難・正受老人・一絲・鉄牛・桃水・誠拙・良寛・雄長・元理・宗因・鬼貫・芭蕉・其角・丈草・路通・風雪・祇空・宗波を加えうる。近世俳人には禪僧が多

い。選民意識を以つて独善高踏安逸を貪らず、『假名法語』を作つて庶民を救済したものとありとして古田紹欽博士の前記の著書には、白隠・盤珪・鈴木正三・鉄眼・松翁・鳩翁をあげた。禪僧の生死解脱を志す崇高な精神と、清規を守る耐乏生活は、儒学の嚴格主義と相俟つて近世武士道を錬磨したことは、家光、吉宗、宮本武蔵、柳生但馬守、大石蔵之助、井伊直弼等傑出した武士が禪僧に師事した事実で明かである。この人達は文芸化されて近世的崇高の輝く光明となつてゐる。近世文芸が優美な程比較したその輝きは強く、多くの人々から讃えられてゐる。禪僧以外には、元祿に寂した国学の大家契沖、西行に私淑し歌集「としなみ草」を遺して宝永二年に寂した似雲、除風、『玉鏡』の著者木食以空、『秘密安心又略』の著者法住、近世屈指の学僧で『十善法語』『人となる道』の著者慈雲尊者がいた。以上は凡て真言僧である。天台僧では平安和歌の四天王と称された澄月(寛政十年寂) 歌人慈延(文化二年寂) 芭蕉の親友素龍、学僧宗淵(安政六年寂) 蕉門の李由(宝永二年寂) がいる。

比叡山の天台宗はシナに於いて、選民思想の教判によつて歪曲され、伝教によつて比叡山に齎らされて尚その轍を踏んで、選民である貴族と天皇族と親密し学閥を誇り教判を強行し、庶民と隔離した為に、假名法語も少いのである。

真言の空海もシナの選民思想を背景とする教判仏教を伝えたが、彼の密教の呪術的・象徴的であることが、庶民の民族性に親近することができたので、自ら假名法語も多いのである。

法然浄土教の開祖法然は、崇徳天皇の長承二年美作久米郡稻岡之

庄に生れ、父は美作の押領使漆間時國である。幼時より仏教々理を研究し、天台、法相、真言、華嚴、密教を学習し続けること三十五年間、四十三歳頃善導大師の觀經散善義を読み、機熟して忽然回心し、智慧第一の法然房は、觀念の囚人より解脱し、愚癡第一の法然房と称する無一物に帰した。回心とは社会意識の脱皮拡大であり、一切価値の転倒である。法然にも教相判釈の余臭はあるが、末法濁世の凡夫を救う他力易行を宗旨として庶民的であり、殊に歴史の変革期の新興階級として刀杖堅固である武士に、無常觀、罪惡觀を起信させたことは特色である。関白九条兼実の為に書いた『選釈本願念仏集』には

若し夫れ造像起塔を以て本願と為たまはば、貧窮困乏の類は、定んで往生の望みを絶たん。然かも富貴の者は少く、貧賤の者は甚だ多し。若し、智慧高才を以て本願と為たまはば、愚鈍下智の者は、定んで往生の望みを絶たん。然るに智慧ある者は少く、愚癡の者は甚だ多し。若し多聞多見を以て、本願と為たまはば、少聞小見の輩は定んで往生の望みを絶たん。然るに多聞の者は少く少聞の者は甚だ多し。若し持戒持律を以て、願と為たまはば、破戒の者は甚だ多し。自余の諸行これに准じてまさに知るべし。(原文漢文)

こうした貴族的選民的仏道の否定思想は、中世から近世にかけて庶民の近代的意識を啓培した。但し近世において庶民に和光同塵した著名僧は少い。南光坊天海は有名であるが、家康・秀忠・家光等權勢に近づき政僧ともいうべき俗物で、詩文の雅趣もない。慶長十年

増上寺の造営に際しての天海の人柄が、「慶長見聞集」に次の如くみられる。

此寺御普請の時分、人足ども石をよなく引、土をすくなふ持を、国師御覽じて、にくひかれらか振舞哉、いにしへ仏道修行としてきそう石を引、うんかん土をはこぶ、其上一向専修といへば、是万事に通ずる所の仏法の大意也。無法者をかしやくするハ、是師家の持戒とせり、いで物見せんと、大声を立、眼をいからし、棒を取て出給へハ、とがあるも、とがなき者も、肝を消し、嵐に木の葉の散ごとし、四方八面へにげ行、あらおそろしや、俗儀のつよき増上寺の上人や、地獄遠きにあらず、目の前の境界、悪鬼外になし、所化共をかしやくせしくせとして、すでに人足ども打殺されんとしたりといひて、ためいきつく事度々に及ぶと、皆人云。

法然の精神は全く滅亡している。徳川氏の保護特に厚きを致した為か、江戸時代中期にもなると浄土宗にも名僧学僧が多く出た。即ち増上寺第三十代の主靈玄。「甲陽軍記」「東鑑脱漏」の著があり、元禄十一年寂。増上寺第三十二代主了也。宝永元年寂。増上寺第三十四代主雲臥。宝永六年寂。増上寺第三十六代の主裕天。性剛直で將軍綱吉の生類憐みを諷諭し人間を尊重すべきを教える等権勢に屈しなかつた。忍徴は正徳元年寂。大藏経を校訂し「勅修御伝縁起」等著述多き学僧であり、道俗の帰依者が多かつた。義山は享保二年に寂。「法然上人行状画図」四十八巻の校訂、文義註釈、事実の考証を完成した。これ即ち「円光大師行状翼賛」である。その他「勅修御伝隨聞記」十巻、「三部経隨聞記」「選釈集講録」三巻等著述が

多い。珂然は延享二年寂。「元亨釈書索隠」「扶桑往生伝」「同拾遺」寺の著作が多い。湛慧は延享四年寂。狹生従来の門に学んでいる。関通は明和七年に寂。著作に「帰命本願鈔加偈語」十巻、一枚起請文梗概聞書三巻がある。諸国を遍歴遊化すること四十八年、一生の間選釈集を講ずること二十回、帰命本願鈔を講ずること三十六遍、得度の僧尼千五百人、円頓戒を授くる者三千余人と称されている。文雄。宝暦十三年寂。太宰春台と交りしを縁として、韻鏡の研究に志し、磨光韻鏡二巻同後編五巻、同余論三巻、和字大観抄二巻、字彙莊嶽音四巻、広韻府一卷、非出定後語一卷等を著した。法然の庶民済度の精神を最も顕現したのは徳本である。年甫めて四歳、隣家の児童の死するを見て忽ち無常を觀じ、他の誨に頼らずして念仏した。十九歳父を喪ひ、二十五歳母に請うて出家し、翌年日高郡の円正寺に寓し、三十日を期して、日に一握の麦を食し、昼夜不斷念仏礼懺を勤め、ついで四方に遊歴したが、同郡千津村民等菴を構へて講じたので、ここに寓し、苦修練行七年を経た。この間身に一袈裟のみを着て余服を蓄へず。日に唯一度蚕豆の許を食ひ、早旦河流に浴して、礼拜念仏昼夜四五千回、称名の外他言を交へず。喉破れ齒動き、ひび輝恰も松皮の如く、寒風膚を裂くも、道心堅固行業少しも懈らなかつた。道俗化を慕ひ、紀州候徳川治貞始め貴頭の尊信を受け、漁者樵夫等も渴仰崇信、利益日に盛んであつた。文政元年寂寿六十一。曳尾菴著「わが衣」に、道俗帰仰の状を次の如く誌している。

文化十一年の七月始方より、江戸四里四方の老幼男女、大に群集すること出来る。其ゆへは、紀州の山奥に壹人の聖あ

り、其名を徳本といふ。されば我も人も其十念を授けて極楽に往生せんと、老となく若きとなく、日夜朝暮蓮通院に充滿したり。

夫レ故に月の五ノ日斗出席して、押合押合上か下に群集する程に、其庭にて悶絶なとせし老人も少からず、……八月の末に至りては、近在五三里か間人々多く出る、小石川水道橋より往來の船數艘出る、其外何となく都而小石川辺より本郷丸山、西は音羽町・目白に至り、南ハ四谷・市谷より・番町・飯田町・小川町辺、(老脱カ)若男女統々として、五ノ日十ノ日は、誠に道路に寸地なし、末はしらず先かくのことし。

「近世の誹諧と発句・狂詩情詩の類みな綺語に撰すべし」(人となる道)といふのが、彼の文芸観である。撰門は天保十年寂。近藤正齋、松崎謙堂、立原翠軒、埴保己一、屋代弘賢等と親交した。「醒醉笑」の著者安樂庵策伝も浄土僧である。

以上は辻善之助博士の『日本仏教史』に出た浄土僧であり、すべて権勢と文化の中心江戸に關係がある。この他に名利を余処に辺土の群類を度した名僧もあつたらう。僧にして著名の者必しも名僧ではない。引つづき辻博士の『日本仏教史』をみると、浄土真宗は近世前期においては一大名化した大教団であつたので信長から征伐され、秀吉家康から制裁をうけたので、教団の護持に懸命になり、今まで僧兵化していた僧は、宗義を学び信仰あるものも少く、本願寺は講・組を作って組織力によって教団の拡張を計画した。講は蔑げられ不平か悲みをもつ者の政治経済結社・懇親会、文化クラブであり、これが団結力は南無阿弥陀仏といふ一神教であつた。この文化的性格の講が、よき指導者を得たら輝かしい文化的成果を得たか

もしれぬが、教団拡張に専念し、文化創造に冷淡な本願寺支配人にこれを期待することはできなかった。日本一の大教団である真宗が、文化創造に熱心であつたら近世文芸にも偉大な貢獻をしたであらう。これは本願寺宗政者のみの責任でなく、「当流には、木像よりは繪像、繪像よりは名号、といふなり」(蓮如上人御一代記聞書)という文化否定の宗義と、信徒の無学と貧賤、一神教による逼狭な人間観、社会観、文化観に因るものである。真宗も近世中期以後になると宗学も漸く霽うて、知空・慧空・汝侍・月筌・慧然・法霖・僧樸・僧谿・慧琳・深勵・宣明・仰誓・淨蓮の如き学僧を多く出した。

淨蓮は江戸梅田澄泉寺住職。冷泉為村に和歌を学んで作歌し、遺稿歌集に獅子巖集がある。安永三年五月寂(近世名歌三十六家集・近世畸人伝)

この人々には宗門の著述は数々あるが、文芸はない。下化衆生の慈悲が足りないのである。説教はしたのであろうが、聞書も遺らぬ。文化を後世に遺伝しようとする歴史愛がないとしか考えられぬ。浅井了意・季吟・大淀三千風・浪花・千那・住口・金龜堂一泉・茶・良寛・蓮月は、親鸞教徒としての文芸をのこしていて、この宗の誇りであるが、その他の教徒は殆んど無学无文で信仰体験の文芸をのこさない。西本願寺碩学仰誓と法嗣履善並に門下、美濃専積寺の僧僧純等によって順次刊行された『妙好人伝』五篇(安政六年完成)にも、溯つて元禄元年沙門了智の編『緇白往生伝』にも、文芸としてとりたてられるものはみられない。真宗が大教団でありえたのは、いやしい教、愚夫愚婦の教と蔑れつつも、地上一切の価値を否定して

行道を宣布したからである。この一切否定の無我から、こそ一切肯定の好文芸が生れねばならぬのに生れないのは、宗我に執している「只念仏して」といふ易からであろう。真宗において蓮如がたのめ救ふと説くたのむ絶対力は、宇宙的遍滿平等の如来の本願であり、本願寺の権勢でも法主でもない。信とは本願が心に実在するとの自覚である。然るに積極的にも経済的にも自主性独立力のない奴隷に等しい封建庶民は、苛烈な大名の搾取、生命をも土芥視して人権を認めぬ武士の權威、朱子学的社会の人間性疎外と相反した真宗の肉食妻帯も赦す寛大な易行忍惡の教に随喜齋集した。

そして教の根柢である本願寺や法主を、現世の浄土活仏として絶対的に信仰し身命財を吝まず供養した。弥陀如来を信するものは、煩惱を除き、死すれば娑婆永劫の苦を捨てて十萬億土西方安養極樂国土に大往生できるという教は、封建の惡世を忍受する精神力となったと共に、疑ふ勿れ信ぜよ無我無欲になれ、万のことみなもってせらぐとたわごとまことあること無きに、ただ念仏のみぞまことに在じます（歎異鈔）といふ教を曲解して、僧俗共に歴史的現実を進化せしめる斗志又は文化の清新な創造力を喪ひ、封建権力の大きなものにまかれて、これを批判する智慧も氣力もなく、無為無作の徒と墮し、これを妙好人の生活、釈迦の大悟に等しいと考えた。それは全く老莊神仙の無為自然・謙下不爭・明哲保身・虛無主義・浪漫主義・本能満足唯美主義に類するものであった。つまり大乘と称した親鸞の教が、外道に墮ち小乗化したのである。これは大乘仏教の墮いる危険性で近世の天台も真言も禪も同じことであった。但し近世の仏教が、根本的に大慈大悲を説くが故に、貴賤を問はず人

間実存の慰めとなり、且は浄土教は浪漫精神、禪は象徵精神といふ風に、文芸精神を培育した功績は認めねばならない。次に日蓮宗は、天台系でも最も敵しく教相判釈を行い法華経信奉以外の宗派を破斥する偏狭な教であることが、当然人生觀、文化觀をも偏狭にし、勝れた文芸も文化も遺しえなかつた。近世においても信長等覇者達の圧迫に耐えて宗勢拡張に身命を賭けた僧は多いが、文芸を創作したのは、元政上人のみといつてもよい。元政は京都に生れ、井伊直孝に仕えた武士であるが、二十六歳日蓮僧となり、深草山瑞光寺を開き学徒を育成した。「風軌恬澹沈冥玄通、世目して如来の後身と為す」（近世叢語）というのが、元政の風格である。平素持律甚だ敵にして、少くの間も袈裟を解かず、兀座して経を誦し、而かも寛仁大度、法界を囊括し、諸教を并吞し、初より自他の異、真俗の差を見ず、道に志す者は悉く掛搭を容した。内外の典に博く、詞章に長じ、旁ら国学を善くし、好んで和歌を作った。源氏物語・日本書記に通じ、平生文墨を以ての交友多く、明人陳元鑾と名古屋に會し、以後贈答の詩篇を、元々唱和集といふ。仏を信じなかつた熊沢蕃山とも交り、北村季吟も元政より教を受け、後水屋院、紀伊頼宣の帰依も得た。著書に艸山集三十卷・如來秘藏録・本朝法華伝・扶桑隱逸伝・元々唱和集・龍華歴代師承伝・艸山要略・艸山和歌集がある。

（艸山集・建仁寺顯令憲所記元政行狀・深草元政上人御伝記・本化別願仏祖統記所収日潮所記艸山開祖元政者和尚伝・青山露村「深草の元政」近世齋語・近世嚙人伝、以上は辻博士日本仏教史に拠つた。）

極めて父母に孝養で、次の如き孝養の詩和歌が多い。

母をおもふ 心をせめて うたはまし 歌のなりては なみたと
まらず

寛文八年寂。遺命により墓石を建て塚上葦植竹雨三卒。僧ではなく
文芸もないが、法華経信者として近世初期文化の最高水準を代表し
た京都の大町人本阿弥光悦(寛文十四年生)と俳諧の貞徳がいる。

抑々日蓮宗の如き宗派的偏執なく、「一色一番無非申道」と諸法
実相三諦即是の玄旨を説く法華経によれば、偉大な芸術・文芸が生
れる訳である。元政や光悦がそれを証している。

日本仏教で無教判宗は、禪と時衆である。禪は蓮民意識を捨て
えず、時衆は庶民仏教である。時衆は、阿弥陀経を所依として一
遍(伏見天皇正徳二年被)が開宗した。近世は庶民文芸の時代であるか
ら、最も庶民的仏教である時衆について観察する必要がある。時衆
は徳川時代に時宗と改称した。時衆の名称は、阿弥陀経の「其人臨
命終時」及び善導の往生礼讃の「恒願一切臨終時」の文に依り、臨
終即ち平生、平生即ち臨終の時なりと観する浄土教の一派である。

即ち臨命終時宗、恒願一切臨終時宗、平生念念臨終時宗、念念称名
念念臨終時宗、念念往生念念臨終時宗の意である。この宗は固定し
た空間的物質的土地財産地位等を否定し、やむをえずは最小限界に
留め、流転無常、一期一会、共生共事の刹那々々時間を涅槃とす
る。日本の庶民は被征服者として土地占有の望を断たれ、仏教の隠
遁思想の影響もあって、時間を尊重して時に立ち、自由人として時
を見、時を活用し時に処した。空間的欲望を捨て、時を尊重すれ
ば、自ら主観を重んじ、象徴的となり、庶民的になる。時宗はこれ
を道とした。時宗徒が蓮歌・俳諧・茶道・庭園・能楽・華道等々の

自然に親しむ文化に貢献しているのは、自然を時の指示教、法身如
來の実相(象徴)と見るからである。時宗は弥陀如來一仏信仰の一
神教であるにかかわらず、汎神教的であるのも右の理由によるが為
である。従ってカトリック無教判で、庶民に相応した信仰に基き、
神社信仰とも直結し、仏教諸派とも優劣を争はず、一生寺院を持た
ず、宗名を使はず、遊行賦算と号して、名号の札を民衆に配って全
國に遊行して結縁し、一定時に貴賤の別なく一堂に会して、和讃唱
和等の行事をなし、宗教心を以て團結した。それは一向宗の講や組
の如き教団勢力拡張の為ではなく、実存の不安を慰め合ひ、剝奪を
永遠に転せんが為、時を文化価値に形成する働きをなした。広く各
種階層の文化人とも会った。新文化創造の機縁ともなった。人間の
煩惱闘争は、土地・妻子珍宝・地位・衣食住等一切の空間的私有に
依るとして、捨家棄欲した釈尊の道を守り、寺院の高位の僧職を望
まず、半僧半俗であった。一遍は空間を軽んじて時間の絶対的価値
を庶民に悟らしめ、念々臨終・念々往生と説いて、假時・刹那時・
無常迅速時に、無量壽無量光の如來の生命を活動せしめんとした。
庶民とは社会の底辺をなす落伍者敗残者被征服者である。近世初期
安土桃山時代にまでも引つがれた下廻上とは、庶民が自ら創造した
文化を以て征服選民の文化生活に参加し指導した事実である。その
庶民の文化指導者の中心が時衆僧である。時衆僧は、僧俗の中間的
存在を示す為に、南無阿弥陀仏の阿弥をとって、観阿弥等と称し
た。將軍義満の側近に待した同朋は、全部阿弥号をもち、義政の同
朋には瓶花の達人立阿弥、造庭師善阿弥がいた。その他文化と時衆
を考えてみると、茶道では東山流茶道の開祖能阿弥光悦・孫の相阿

弥。茶道と関係ある釜師には、其阿弥。華道には相阿弥、富阿弥がいた。蔭絵に法阿・見阿・光阿・幸阿。絵画に能阿弥・相阿弥・景阿弥等の阿弥派。和歌に浄阿・頓阿・嚴阿・由阿・切臨。連阿では善阿・良阿・周阿・久阿・頭阿・畠阿・能阿・成阿・梵阿・秀阿・伝阿・賀阿・愛阿・乗阿等極めて多い。阿弥号ではないが救済心敬・宗祇もいる。宗長・肖柏も加えてよくはないか。俳諧には惟然がいる。猿樂では大和に南阿弥・他阿弥・教阿弥・觀阿弥・世阿弥・音阿弥。近江に道阿弥・田樂には喜阿・飯阿・玉阿・徳阿がいた。滑稽本作者では好阿がいた。以上の阿弥号者は一遍以来安土桃山時代迄に活動した時衆であるが、茶道・芸能・工芸についての貢獻の大なることがしられる。更に吉川清氏の説によれば、歌舞伎の始源は、水尾天皇の慶長十八年に没したとされる出雲お国の念仏であり、念仏踊は時宗の踊躍念仏を起源とする。而してお国は時衆の沙弥尼であつたとして、次の様にのべていられる。

念仏信仰の歡喜踊躍に端を發した時宗の踊念仏が、そのはじめ「はだかとなれども見苦しき所をもがくさず、偏へに狂人のごとくにして」との酷評を受けた程、狂乱の舞踊であつた頃から、聖岡をして「声と足と拍子を調べて面白く」と云わしむる迄に音楽舞踊として發達し、ついにこの信仰行儀は、時衆末徒の生活の爲の演技と化するに至つた。……然るに彼等が、これを看板にして、より多くの信徒（實は投銭）を負る爲には、勢い踊念仏は演技化して、果ては美装を凝し、脂粉に身をやつして觀衆に媚を売るといふ様態に創意をこらすことが必要であつた。……初期時衆が信仰によつて剃髮出家して、時衆の僧尼乃至は在家時衆となつた

のであるが、その末流には踊躍念仏を職業とした沙弥尼の中には、番髪美粧の女芸人となつた者もあり、或はこれを以て売色をカムクラージュする具に供する者も現はれ事にいたつたことが示唆される。茲に於て直ちに想起されるのは、歌舞伎劇の始視と仰がれている出雲のお国もこの徒ではなかつたかということである。

（時衆阿弥教團の研究・第三章文化史上に現れたる時衆の阿弥）
更に吉川氏は、征夷大將軍徳川氏は時衆の子孫である。この幕府の封建制度強化の爲、踊躍念仏と和讃によつて信徒を受けて糊口をしのいだ阿弥族は、四階級以下の賤民の状態に陥入り、賤民として蔑視されたとのべている。（全書三六三―三四頁）

無教判仏教として自由民的な道を歩み宗我をもつて宗勢の拡張を企てなかつた遂に衰微したが、創始した茶道・能楽・俳諧（連歌より發達）は、高貴なる文化として、日本芸術美の中核体として庶民は勿論支配階級に愛賞され、生活の精神となつた。この意味で時衆は死せず、長生不死の神法である。その芸術（雍州府志にこの語あり）は、「大智度論釈」に、「菩薩位の中に住し、甚深微妙なる無文字法を以て、衆生を導引する。是を方便と名く」とある方便般若である。

空間を捨て臨終命終時に立つた自由人の勝利である。能楽も茶道も賤民の賤術（雍州府志に田樂・謡曲を賤術といふ）であつたものが、將軍大名大寺富豪に採用された史実は、正に下剋上である。能楽を貴族に採りあげられて慰楽を制せられた庶民は、根づよい雑草の春萌の如く歌舞伎と浄瑠璃を創作した。近世の庶民を最も博大に薰化したものは、この二つの演劇と歌謡である。芭蕉が伝統とし

て仰いだ時衆に連歌師心敬宗祇がいる。芭蕉の行脚は西行や禪の一処不住行雲流水を学ぶと共に、一遍の遊行並に心敬宗祇の遊行を継いでいることは、俳諧が連歌を源泉としていることと同様にまちがいない。談林の三千風・蕉風門下・蕪村の行脚も芭蕉同様に考えられる。

源氏物語の美意識「ものあはれ」のものは古代にあって庶民が信仰した靈的精神の実在であった。一切の存在又は現象は、ものを宿しているといふ感情が、自然的素朴な庶民信仰であった。換言すれば崇高と優美―宗教的感情と人倫美との融合が、「ものあはれ」といふ詞に兼ねられている。これを継承しているのが、有心連歌である。「詞につきて不審をひくかたは、源氏物語にすぎたるはなし」(順徳院・八雲御抄)「源氏見ざる歌詠は遺恨のことなり」(井蛙抄・頓阿)「俊成卿の源氏見さらむ歌よみは口惜事と申されき」(愚問賢注・二条良基)「愚老が歌心の付たる事は、源氏を三反披見して後より風情も心も出来し也」(了俊一子伝・了俊)「ふるまいことばのえんにけだかきは、源氏袞衣なり」(ささめごと・心敬)「俊成は源氏詠まさらむ歌よみは遺恨の事」(宗祇指南抄)とある。有心連歌も亦ものあはれ美を中軸として、庶民仏徒の時衆心敬、宗祇等により大成された。これを更に庶民の生活に還したのが、貞徳・西鶴であった。

吉川清氏の『時衆阿弥教団の研究』によれば、徳川氏の祖先は、時宗の沙弥であり、この故に家康は時宗に恩むことがあったが、その後徳川氏と罅裂を生ずることがあり、更に家光の鎖国政策に伴って強化された封建制度の再組織によって、時宗は財源に困り、賤民

として遇された。その職業は、宗祖遺誡の金鼓を打ち、和讃並びに踊躍念仏を修して信施を仰いで生活の資として居たことが知られ、後には各地に土着して農耕、医師等を営んだらしい。これに反し征服者である遠民階級は、空間占有の意識が強く、空間偏重に傾き、王侯貴族の・戦鬪的になり、近世の徳川氏も、その出自を忘れ、シナの儒教を以て国教とし、その為に階級觀念が強くなり、人類觀念乏しく外国を侮る中華思想、外国を敵視する鎖国思想に執はれ、非人情な嚴格主義者が支配階級に坐した。この人達は空間的所有を保守する為に、新規を恐れ形式を踏襲して、批判・冒險・進取の精神が萎縮し、新文芸は創造し得なかつた。(紙教に制限あり未完結)

参考書 辻 善之助 日本仏教史近世篇

中島 睦玄 仏教の新研究

法 藏 館 講座近代仏教

岩 波 日本歴史近世1

日本文化フォーラム編 日本文化の伝統と変遷

吉川 清 時衆阿弥教団の研究

補注

① 隆達小歌を始めた隆達慶長六年没は、曹洞宗の僧であった。

② 歌人長嘯子(慶安二年没)は、臨濟僧であった。